

教行信証における涅槃經の研究

巖城孝憲

要旨

親鸞聖人の『教行信証』において、「真実の教」として掲げられてある『大無量寿經』を根本とし、他の諸經典からの經文証としては、『涅槃經』の重要な位置が、古来より指摘されていることである。「信卷」では、阿闍世王の回心と逆謗闡提の救済が重要なテーマとして論じられており、「真仏土卷」では、光明無量・寿命無量の願成就の真実報土が、『涅槃經』からの經文証によって、明らかにされている。今回、『教行信証』に、30 数カ所も引用されている『涅槃經』の經文を、元の『涅槃經』本文へ帰して、その前後を読み取り、宗祖が、どのような意図をもって、まさにその部分を取り出されたのか、「乃至」の語によって略されたのはどのような語句なのか、読み替えがなされている箇所もあるのかどうか、そのような視点から、難解な『教行信証』の思想を、解明したいと願っている。

キーワード：教行信証、涅槃經、阿闍世

序

『教行信証』における經文証として、『涅槃經』からの引用は、非常に重要な位置を占めていると古来より言われている。天台大師の五時教判における『涅槃經』の教相判釈はもとより、『教行信証』の「信卷」における阿闍世王の回心と逆謗闡提の救済の問題、そして「真仏土卷」における光寿二無量の願成就の世界等、いずれも、『涅槃經』の教言に依らなければ、『大無量寿經』の真実が明らかにはならないほど重要な位置にあると言われている。

『涅槃經』本文に返して、引用された部分を照合してみると、引用文を取り出すに当たって、宗祖は、何故その箇所を前後を裁断されたのか。あるいは、引用された部分にも、「乃至」の語を置いて、非常に原典を忠実であろうとされていることが分かるが、何故「乃至」として中略されたのか。単に、長い引用を簡潔にしようとされたことも考えられるが、単にそれだけの理由によるものなのかどうか。『教行信証』には、善導大師の『観経疏』からも釈文証として多く引用されているが、かつて、「信卷」を見ている時、「乃至」として中略された文章がそっくりそのまま、「化身土卷」に配置されているのを知り、そのことは、宗祖の厳密な如来回向の他力の信に対して、自力をいささかも交えない厳密な考察の故であることを教えられたことがあったが、『涅槃經』の引文に関しては、どのようなことが言えるのであろうか。

このたび、上記の観点から、『教行信証』に引用された 30 数カ所にも及ぶ『涅槃經』からの引文を、元々の『涅槃經』本文の箇所へ返して、その前後の文脈から、宗祖がその引文を取り出された意図を汲み取り、難解な『教行信証』を解明する一助としたいと考えた。そのため、『教行信証』に引用された順ではなく、『涅槃經』本文に返し、『涅槃經』の品順によって検討していきたい。尚、引用の回数は、古来より 30 数カ所と言われているが、「乃至」の扱いによっては、より数が増える数え方もあると思われる。

『涅槃經』には、北本(四十卷)と南本(三十六卷)があるが、北本を原典とし(『大正新修大藏經』第 12 卷所収)、読み下しの文を作成するにあたっては、『教行信証』に引用された『涅槃經』の經文には、宗祖の坂東本の訓点による(アンダーラインで示す)読み方により表記し、その前後の文章については、一般的な読み方に従った。宗祖独自の読みかえの箇所については、特に注意しながら、その真意を探ろうとしたつもりである。

底本としては、以下の書に依った。

『大般涅槃經』北凉天竺三藏曇無讖訳 『大正新修大藏經』第 12 卷、365 頁—603 頁

『定本親鸞聖人全集』第 1 卷「教行信証」、2008 年、法蔵館

研究書としては、次の書がある。

北村文雄『教行信証と涅槃經』、2014 年、永田文昌堂

『教行信証』における『涅槃經』からの經文証の位置を、「教卷」からの順序次第で表記すると、以下のようになる。『定本親鸞聖人全集』(『親聖全』と略)第 1 卷「教行信証」の頁数によって示す。尚、東本願寺出版部刊の『真宗聖典』(『真宗聖典』と表記)の対応の頁数と、巻ごとに打たれている科文ナンバーも付記することとした。

教巻	(なし)			
行巻	親聖全	76 頁	大正蔵 443 頁 b	真宗聖典 197 頁(科文 114)
		77 頁	515 頁 b	197 頁(115)
		77 頁	524 頁 c	197 頁(116)
		77 頁	526 頁 a	197 頁(117)
信巻		119 頁	443 頁 b	227 頁(39)
		120 頁	589 頁 c	227 頁(40)
		122 頁	556 頁 c	229 頁(44)
		123 頁	573 頁 c	229 頁(45)
		123 頁	575 頁 b	229 頁(46)
		137 頁	575 頁 c	240 頁(82)
		143 頁	527 頁 a	244 頁(102)
		153 頁	426 頁 c	251 頁(137)
		153 頁	431 頁 b	251 頁(140)
		154 頁	474 頁 a	252 頁(141)
		165 頁	480 頁 c	259 頁(142)
		178 頁	565 頁 b	271 頁(143)
証巻	(なし)			
真仏土巻		233 頁	392 頁 a	303 頁(12)
		234 頁	402 頁 a	304 頁(13)
		234 頁	445 頁 c	304 頁(14)
		235 頁	465 頁 c	305 頁(15)
		236 頁	503 頁 a	305 頁(16)
		238 頁	503 頁 a	306 頁(17)
		239 頁	514 頁 c	307 頁(18)
		239 頁	562 頁 b	307 頁(19)
		241 頁	562 頁 c	308 頁(20)
		243 頁	563 頁 c	310 頁(21)
		246 頁	465 頁 c	311 頁(22)
		246 頁	567 頁 a	311 頁(23)
		247 頁	573 頁 a	312 頁(24)
		248 頁	527 頁 c	312 頁(25)
化身土巻		302 頁	573 頁 c	352 頁(91)
		303 頁	575 頁 b	352 頁(92)
		305 頁	511 頁 b	353 頁(93)
		327 頁	409 頁 c	368 頁(123)

以上は、『教行信証』における引用順に『涅槃経』の出典箇所を示したが、本論稿は、それら出典を、『涅槃経』に返した、その順に示そうとするものである。今回検討できる経文を、「大正蔵」の頁順に、示しておくならば、以下の経文の順となる。今回検討できなかった経文については、いずれかの機会に続稿として発表したい。

(1) 真仏土巻	親聖全	233 頁	大正蔵 392 頁 a	真宗聖典 303 頁(科文 12)
(2) 真仏土巻		234 頁	402 頁 a	304 頁(13)
(3) 化身土巻		327 頁	409 頁 c	368 頁(123)
(4) 信巻		153 頁	426 頁 c	251 頁(137)
(5) 信巻		153 頁	431 頁 b	251 頁(140)
(6) 行巻		76 頁	443 頁 b	197 頁(114)
(7) 真仏土巻		234 頁	445 頁 c	304 頁(14)
(8) 真仏土巻		246 頁	465 頁 c	311 頁(22)
(9) 真仏土巻		235 頁	465 頁 c	305 頁(15)

(1)

(392 頁 a) 眞の解脱は即ち是如來なり。如來と解脱とは、無二無別なり。譬へば春月に諸の種子を下すに、煖氣を得已れば尋いで便ち出生するが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。又、解脱は名づけて虚無と曰ふ。虚無即ち是れ解脱なり。解脱即ち是れ如來なり。如來即ち是れ虚無なり。非作の所作なり。凡そ是の作とは、猶し城郭樓觀却敵の如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。是の故に解脱即ち是れ如來なり。又解脱は即ち無爲法なり。譬へば陶師が作り已りて還って破するが如し。解脱は爾らず。眞の解脱は不生不滅なり。是の故に解脱即ち是れ如來なり。如來も亦た爾なり。不生不滅、不老不死、不破不壞にして有爲の法にあらず。是の義を以ての故に名づけて「如來入大涅槃」と曰ふ。不老不死に何等の義か有りや。老とは名づけて遷變と爲す。髮白く面皺む。死とは身壞れ命終るなり。是の如き等の法は解脱の中に無し。是の事無きを以ての故に解脱と名づく。如來も亦髮白く面皺む有爲之法無し。是の故に如來に老有ること無きなり。老有ること無きが故に死有ること無し。^[註1]

(393 頁 c) 「能く過ぐる者無し」とは即ち眞解脱なり。眞解脱とは即ち是如來なり。又、解脱とは名づけて無上と爲す。譬へば北方は諸方の中の上なるが如し。解脱も亦爾なり。上有ること無しと爲す。「上有ること無しと爲す」とは即ち眞解脱なり。眞解脱とは即ち是如來なり。又、解脱は無上上と名づく。譬へば北方の、東方に於て、上上無しと爲すが如し。眞解脱も亦爾なり。上上有ること無し。無上上は、即ち眞解脱なり。眞解脱は、即ち是如來なり。又、解脱とは名づけて恒法と曰ふ。譬へば人天の身壞し、命終るを、是を名づけて恒と曰ふが如し。不恒に非ざる也。解脱も亦た爾なり、是不恒に非ず。不恒に非ざるは即ち眞解脱なり。眞解脱は、即ち是如來なり。又、解脱とは名づけて堅實と曰ふ。^[註2]

(395 頁 c) 又、解脱とは名づけて離愛と曰ふ。譬へば人有りて、愛心より釋提恒因・大梵天王・自在天王を希望するが如し。解脱は爾らず。若し阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得已りて無愛無疑なり。無愛無疑は即ち眞解脱なり。眞解脱は即ち是如來なり。若し解脱に愛・疑有りと言はば、是の處有ること無し。又、解脱とは、諸有の貪を斷じ、一切相・一切繫縛・一切煩惱・一切生死・一切因縁・一切果報を斷ず。是の如きの解脱は、即ち是如來なり。如來は、即ち是涅槃なり。一切衆生は、生死の諸煩惱を怖畏するが故に。故に三歸を受く。譬へば、群鹿の、獵師を怖畏して、既に免離を得るが如し。若し一跳を得るは、則ち一歸に喩ふ。是くの如きの三跳は、則ち三歸に喩ふ。三たび跳るを以ての故に、安樂を受くるを得。衆生も亦爾なり。四魔・惡獵師を怖畏するが故に、三歸依を受く。三歸依の故に、則ち安樂を得。安樂を受くるは即ち眞解脱なり。眞解脱は即ち是如來なり。如來は即ち是涅槃なり。涅槃は即ちは無盡なり。無盡は即ち是佛性なり。佛性は即ち是決定なり。決定は即ち是阿耨多羅三藐三菩提なりと。迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若し涅槃と佛性と決定と如來と、是れ一義名ならば、云何ぞ説きて三歸依有りと言たまへるや」と。佛、迦葉に告げたまはく、「善男子、一切衆生、生死を怖畏するが故に、三歸を求む。三歸を以ての故に、則ち佛性と決定と涅槃とを知るなりと。善男子、法の名一義異なる有り。法の名義俱異なるあり。名一義異とは、佛と常法と常比丘僧とは常なり。涅槃・虚空、皆亦是常なり。是を名一義異と名づく。名義俱異とは、佛を名づけて覺と爲す、法を不覺と名づく、僧を和合と名づく、涅槃を解脱と名づく、虚空を非善と名づく、亦無礙名づく。是を名義俱異と爲す。善男子、三歸依とは亦復是の如し。名義俱異なり。云何ぞ一と爲ん。是の故に我、摩訶波闍波提に告ぐらく、「憍曇彌、我を供養すること莫れ。當に僧を供養すべし。若し僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得。摩訶波闍波提、即ち我に答へて言はく、「衆僧の中に、佛無く法無し。云何ぞ説きて衆僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得と言ひたまふ。」^[註3]

(2)

(402 頁 a) 是の如きを、名けて不了義と爲す也。是の故に、應に聲聞乘に依るべからず。大乘の法は、則ち應に依止すべし。何を以ての故に。如來は衆生を度せんと言ふが爲の故に、方便力を以て大乘を説く。是の故に應に依るべし。是を了義と名づく。是の如き四依は應當に證知すべし。復次に義に依れとは、義は質直と名づく。質直とは、名づけて光明と曰ふ。光明は不羸劣に名づく。不羸劣とは名づけて如來と曰う。又、光明は名づけて智

慧と爲す。質直とは名づけて常住と爲す。如來，常とは名づけて依法と爲す。法とは常と名づけ，亦無邊と名づく。思議す可からず，執持す可からず，繫縛す可からず。而も亦見る可し。若し説きて不可見と言う有らば。是くの如き人は，依る應からざる所なり。是の故に，法に依りて人に依らざれ。若し人有りて，微妙の語を以て無常を宣説すとも，是くの如き言は，依る應からざる所なり。是の故に，義に依りて語に依らざれ。^[註4]

(3)

(409 頁 c) [迦葉菩薩言さく]願はくは如來の祕密の寶藏を説きたまへ

迦葉，汝，當に知るべし 我，今當に汝が爲に
善く微密義を開きて 汝が疑をして斷つことを得令むべし
今當に至心に聽くべし 汝，諸の菩薩において
則ち第七佛と其一名號を同じうす
佛に歸依せば，眞の優婆塞と名づく
終に更，其の餘の諸天神に歸依せざれ
法に歸依せば，則ち殺害を離れ
聖僧に歸依せば，外道を求めず
是くの如く三寶に歸せば則ち無所畏を得^[註5]

(4)

(426 頁 b)爾の時，文殊師利法王の子，復佛前に於て，偈を説きて言さく，

他の言語に於て 隨順して逆はず 亦，他の作と不作とを觀ぜずして 但自ら身の善不善行を觀ぜよ
世尊，是くの如く此法藥を説くも，正説と爲すに非ず。「他の語言に於て，隨順して逆はず」とは，唯願はくは如來，哀みを垂れて正説したまへ。何を以ての故に。世尊，常に説きたまはく，一切の外は九十五種を學ぶで，皆惡道に趣く，聲聞の弟子は，皆正路に向ふ。若し禁戒を護り，威儀を攝持し，諸根を安愼する，是くの如き等の人は，深く大法を樂ひ，善道に趣向するなり。如來，何が故ぞ，九部の中に於て，他を毀る有るを見て，則便呵責したまふ。是くの如きの偈の義，何の所趣とか爲す。」佛，文殊師利に告げたまはく。「善男子，我，此偈を説くは，亦盡く一切衆生の爲にせず。爾の時に，唯，阿闍世王の爲にせり。諸佛世尊は，若し因縁無ければ，終に逆へ説かず。因縁有るが故に，乃ち之を説くのみ。善男子，阿闍世王は，其の父を害し已りて，我が所に來至し，我を折伏せんと欲して，是くの如きの問を作さく。「云何が世尊，一切智有りや，一切智に非ざるや。若し一切智ならば，調達は往昔無量世の中に，常に惡心を懷き，如來に隨逐して，殺害を爲さんと欲せり。云何ぞ如來，其が出家を聽したまへる」と。善男子，是の因縁を以て，我，是の王の爲に，此の偈を説けり。

他の言語に於て 隨順して逆はず 亦，他の作と不作とを觀ぜずして 但自ら身の善不善行を觀ぜよ^[註6]

(5)

(431 頁 b) [佛，迦葉菩薩に言はく。]「亦去來・生滅・老壯・出沒・傷破・解脫・繫縛無し。亦自説せず，亦他に説かず。亦自解せず，亦他を解せず。安非ず，病非ず。善男子，諸佛世尊も亦復是の如きこと，猶し虚空の如し。云何ぞ當に諸病苦有るべきや。迦葉，世に三人有り，其の病治し難し。一つには謗大乘，二つには五逆罪，三には一闍提なり。是の如きの三病，世の中に極重なり。悉く聲聞・緣覺・菩薩の能く治する所に非ず。善男子，譬へば病有れば必ず死するに治すること難きに，若し瞻病隨意的醫藥有らむが如し。若し瞻病隨意的醫藥無からむ，是くの如きの病，定んで治すべからず。當に知るべし，是の人，必ず死せむこと疑はずと。善男子，是の三種の人，亦復是の如し。[佛・菩薩に従いて聞治を得終りて，即ち便く阿耨多羅三藐三菩提心を發せむ。]若し聲聞・緣覺・菩薩有りて，或ひは法を説き，或ひは法を説かざる有らむ，其れをして阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむること能はず。迦葉，譬へば病人の，若し瞻病隨意的醫藥有れば，則ち差え令む可きが如し。若し此の三無ければ，則ち差ゆ可からず。聲聞・緣覺も，亦復是くの如し。佛・菩薩に従ひ，聞法を得已りて，即ち能く阿耨多羅三藐

三菩提心を發す。法を聞かずして能く心を發すに非ざる也。迦葉、譬へば病人の、若しは瞻病隨意醫藥有るも、若しは瞻病隨意醫藥無きも、皆悉く差ゆ可きが如し。一種の人も亦復、是如くなる有り。或は聲聞に値ふも聲聞に値はざるも、或は緣覺に値ふも緣覺に値はざるも、或は菩薩に値ふも菩薩に値はざるも、或は如來に値ふも如來に値はざるも、或は法を聞くを得るも、或は法を聞かざるも、自然に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。^[註7]

(6)

(443 頁 b) 文殊師利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく。「世尊、言ふ所の實諦は、其の義云何。」佛、言はく。「善男子。實諦と言ふは、名づけて眞法と曰ふ。善男子。若し法の眞に非ざれば、實諦と名づけず。善男子。實諦とは顛無く倒無し。顛倒無ければ、乃ち實諦と名づく。善男子、實諦とは虚妄有ること無し。若し虚妄有れば實諦と名づけず。善男子、實諦は名づけて大乘と曰ふ。大乘に非らざるは實諦と名づけず。善男子、實諦は是れ佛の所説なり、魔の所説に非ず。若し是れ魔説は佛説に非ざれば、實諦と名づけず。善男子、實諦は一道清淨にして、二有ること無き也。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名づけて實諦の義と爲す。」文殊師利、佛に白して言さく。「世尊。若し眞實を以て實諦と爲さば、眞實の法は、即ち是如來・虚空・佛性なり。若し是の如くんば、如來・虚空及佛性とは差別有ること無けん。」佛、文殊師利に告げたまはく。「苦有り、諦有り、實有り。集有り、諦有り、實有り。滅有り、諦有り、實有り。道有り、諦有り、實有り。善男子、如來は苦に非ず、諦非ず、是實なり。虚空は苦非ず、諦非ず、是實なり。佛性は苦非ず、諦非ず、是實なり。文殊師利、言う所の苦とは、無常相と爲す。」^[註8]

(7)

(445 頁 c) 善男子、佛性は即ち是如來、如來は即ち是法、法は即ち是常なり。善男子、常とは即ち是如來、如來は即ち是僧、僧は即ち是常なり。是の義を以ての故に、因従り生ずる法は、名づけて常と爲さず。是の諸の外道は、一法として因従り生ぜざること有ること無し。善男子、是の諸の外道は、佛性・如來及法を見ず。是の故に外道の言説す可き所は、悉く是妄語にして、眞諦有ること無し。諸の凡夫人は、先に瓶衣・車乘・舍宅・城郭・河水・山林・男女・象馬・牛羊を見、後に相似たるを見て、便ち是を常と言ふ。當に知るべし、其の實は是常に非ざる也。善男子、一切の有爲は皆は無常なり。虚空は無爲なり、是の故に常と爲す。佛性は無爲なり、是の故に常と爲す。虚空は即ち佛性なり、佛性は即ち是如來なり、如來は即ちは無爲なり、無爲は即ち是常なり、常は即ち是れ法なり、法は即ち是れ僧なり、僧は即ち無爲なり、無爲は即ち是れ常なり。善男子、有爲の法に凡そ二種有り。色法・非色法なり。非色法とは心・心數法なり。色法とは地水火風なり。善男子、心を無常と名づく。何を以ての故に。性は是攀緣・相應・分別の故なり。善男子、眼識性異、乃至意識性異、是の故に無常なり。善男子、色境界異、乃至法境界異、是の故に無常なり。善男子、眼識相應異、乃至意識相應異、是の故に無常なり。善男子、心若し常ならば、眼識應に獨一切法を緣ずべし。善男子、若し眼識異、乃至意識異ならば、則ち無常なりと知る。法相に似て、念念に生滅するを以て、凡夫、見已りて之計して常爲す。善男子、諸の因緣相は破壊す可きが故に、亦無常と名づく。^[註9]

(449 頁 a) 時に佛、讀じて言はく、「善い哉、善い哉。善男子、是くの如く、是くの如し。汝が説く所の如し。是の諸の大乗方等經典は、復無量の功德を成就すと雖も、是の經に比せんと欲せば、喩を爲すことを得ず。百倍・千倍・百千萬億倍、乃至算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。善男子、譬へば牛従り乳を出す、乳従り酪を出し、酪従り生蘇を出す、生蘇従り熟蘇を出す、熟蘇従り醍醐を出す、醍醐最上なり。若し服すること有る者は、衆病皆除くる。所有の諸の藥、悉く其の中に入るが如し。善男子、佛も亦是くの如し。佛従り十二部經を出す、十二部經従り修多羅を出す、修多羅従り方等經を出す、方等經従り般若波羅蜜を出す、般若波羅蜜従り大涅槃を出す。猶し醍醐の如し。醍醐と言ふは、佛性に喩ふ。佛性は則ち是如來なり。善男子、是の如きの義の故に、説きて「如來所有の功德、無量無邊不可稱計」と言へり。迦葉菩薩、佛に白して言はく。「世尊、佛の讀じたまふ所の如し、「大涅槃經は猶し醍醐の如く、最上最妙なり。若し能く服する有れば、衆病悉く除く。一切諸藥は、悉く其の中に入る」と。我、是を聞き已りて、竊かに復思念す。「若し是の經を聽受すること能はざる有らば、當に知る

べし。是の人は、大愚癡にして善心有ること無しと爲す。」世尊、我、今において、實に能く、皮を剥ぎて紙と爲し、血を刺して墨と爲し、髓を以て水と爲し、骨を折りて筆と爲して、是くの如き大涅槃經を書寫し、書し已りて讀誦し、其をして通利なら令め、然して後、人の爲に其の義を廣く説くに堪忍す。^[註10]

(8)

(465頁b)「[佛の曰く]善男子、如來に虚妄の言無しと雖、若し衆生の、虚妄の説に因りて、法利を得るを知らば、隨宜方便して則ち爲に之を説く。善男子、一切の世諦は、若し如來に於ては、即ち是第一義諦なり。何を以ての故に。諸佛世尊は、第一義の爲の故に、世諦を説き、亦衆生をして第一義諦を得令む。若し衆生をして是くの如き第一義を得ざら使めば、諸佛は終に世諦を宣説せじ。善男子、如來が時有りて世諦を演説せば、衆生は「佛、第一義諦を説きたまふ」と謂ふ。時有りて第一義諦を演説せば、衆生は「佛、世諦を説きたまふ」と説く。是則ち諸佛の甚深の境界にして、是聲聞・縁覺の所知に非ず。善男子、是の故に、汝、先に難じて「菩薩摩訶薩は所得無し」と言ふ應からざる也。菩薩は常に第一義諦を得。云何んぞ難じて所得無しと言はむ耶。」迦葉、復言さく。「世尊、第一義諦を亦名づけて道と爲し、亦菩提と名づく、亦涅槃と名づく。若し菩薩の、道・菩提・涅槃を得る有りと言う有らば、即ちは無常なり。何を以ての故に。法若し常ならば、則ち得可からず。猶し虚空の如し。誰か得る者有らむ。^[註11]

(9)

(465頁c)世尊、世間の物の、本無今有は、名づけて無常と爲すが如く、道も亦是くの如し。道若し得可くんば、則ち無常と名づく。法若し常ならば、得無く生無く、猶し佛性の、得無く生無きが如し。世尊、夫れ道とは、非色非不色・不長不短・非高非下・非生非滅・非赤非白・非青非黃・非有非無なり。云何んぞ如來は説きて「可得」と言ふ。菩提涅槃も、亦復是くの如し。」

佛の言はく、「是くの如く是くの如し。善男子、道に二種有り。一つには常、二つには無常なり。菩薩の相に、亦二種有り。一つには常、二つには無常なり。涅槃も亦爾なり。外道の道を、名づけて無常と爲す、内道の道は、之を名づけて常と爲す。聲聞・縁覺の所有の菩提を、名づけて無常と爲す、菩薩・諸佛の所有の菩提、之を名づけて常と爲す。外の解脱は、名づけて無常と爲す、内の解脱は、之を名づけて常と爲す。善男子、道と菩提と、及び涅槃、悉く名づけて常と爲す。一切衆生は、常に無量の煩惱の爲に覆はれて慧眼無きが故に、見ることを得ること能はずして、諸の衆生、戒定慧を修するを見むと欲ふが爲に、修行を以ての故に、道と菩提と及び涅槃とを見る。是を菩薩の得道菩提涅槃と名づく。道の性相、實に不生滅なり。是の義を以ての故に、投持す可からず。善男子、道は色像無しと雖も、見つ可し、稱量して知りぬ可し。而るに實に用ゆ有りと。善男子、衆生の心の如きは、是れ色に非ず、長に非ず短に非ず、麤に非ず細に非ず、縛に非ず解に非ず、見に非ずと雖も、法として亦是れ有なり。是の義を以ての故に、我、須達の爲に、説きて言はく。「長者、心を城主と爲す。長者、若し心を護らざれば、則ち身口を護らず。若し心を護れば、則ち身口を護る。善く是の身口を護らざるを以ての故に、諸の衆生をして、三惡趣に到ら令む。身口を護れば、則ち衆生をして人天の涅槃を得令む。得とは眞實と名づけ、其不得とは、眞實と名づけず。善男子、道と菩提と及び涅槃と、亦復是の如く、亦有亦常なり。如其れ無ならば、云何ぞ能く一切の煩惱を斷ぜん。其の有を以ての故に、一切の菩薩は、了了に見知す。^[註12]

註

[註1] 『涅槃經』「如來性品第四」(北本・四十卷本)、「四相品」(南本・三十六卷本)からの引文で、「真仏土卷」における「壽命無量」を明かす一段である。主題は、「大般涅槃」偉大なる涅槃は、死ではなく、生死を超えたものであることを明かし、今、ここでは、眞實の解脱とは何か、という問題を主題としている。眞の解脱＝如來＝虚無＝無為法＝不生不滅であつて、生滅する有為法とは異なることを明かす。宗祖の文章には、いわゆる転釈と言われる言い替えの表現が、しばしば見受けられるが、この『涅槃經』に、転釈の表現が頻出しているのを見ると、ここに淵源があると思われる。『唯信鈔文意』には、次のような言葉がある。

大涅槃とまふすに、その名無量なり、くわしくまふすにあたわず、おろおろその名をあらはすべし。「涅槃」をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心なり、この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心すなわち仏性なり、仏性すなはち法性なり、法性すなわち法身なり。法身はいろもなし、かたちもまします。しかればこころもおよばれずことばもたへたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちをば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけけたまつりたまへり。この如来を報身とまふす、誓願の業因にむくひたまへるゆへに報身如来とまふすなり。報とまふすはたねにむくひたるなり。『定本親鸞聖人全集』(以下、「定親全」と略)第三卷、和文篇、170-171頁)

続稿に後出となすと思われるが、「定親全」第三卷、241頁-243頁にも、膨大な数の転釈が示される。

また、『浄土和讃』には、『涅槃經』にもとづく、次のような和讃がある(『定親全』第二卷、和讃篇、56-57頁)。

無上上は真解脱 真解脱は如来なり 真解脱にいたりてぞ 無愛無疑とはあらわるる(5)

平等心をうるときを 一子地となづけたり 一子地は仏性なり 安養にいたりてさとるべし(6)

如来すなはち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり 凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし(7)

信心よこぶそのひとを 如来とひとしとときたまう 大信心は仏性なり 仏性すなはち如来なり(8)

「無上上」には、左訓で、「ほふしん(法身)をむしやうしやう(無上上)ともいひしんけたち(真解脱)ともいふ」とあり、「一子地」には、「三かい(界)のしゆしやう(衆生)をわか(我)ひとりこ(一人子)とおも(思)ふことをう(得)るをみちしち(一子地)といふなり」とある。「凡地」には、「ほむふ(凡夫)のゐところ(居所)」とある。

[註2] 先ほどの和讃に、「無上上は真解脱 真解脱は如来なり」とあったが、この経文が典拠であろうと思われる。

[註3] 同じ「如来性品」ではあるが、393頁cから395頁cまで飛んでおり、宗祖は、「乃至」の語によって「中略」を示されるが、「乃至」でも、教行のこともあるが、教頁に及ぶこともある。

「如来性品」(「四相品」)からの引用によって、「真仏土卷」において、如来の光寿二無量のうち、まず「寿命無量」を明かす経文証が掲げられている。次に、「如来性品」(南本では「四依品」)からの引用で、「光明無量」の経文証が掲げられる。

[註4] 「如来性品」より、「真仏土卷」への引文であり、光明無量を明かす。『唯信鈔文意』に、「しかれば阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとするべし」(『定親全』第三卷、和文篇、172頁)とあり、『尊号真像銘文』に、「光如来とまふすは阿弥陀仏なり、この如来はすなはち不可思議光仏とまふす。この如来は智慧のかたちなり」(『定親全』第三卷、和文篇、87頁)とある。『一念多念文意』にも、光明と智慧の関係を明らかにする、宗祖の次のような言葉がある。

この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆへに、報身如来とまふすなり。これを尽十方無碍光仏となづけけたまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏ともまふすなり。この如来を方便法身とはまふすなり。方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたまふをまふすなり。すなわち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ、不可思議光仏とまふすなり。この如来、十方微塵世界にみちみちたまへるがゆへに、無辺光仏とまふす。しかれば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけけたまつりたまへり。(『定親全』第三卷、和文篇、145-146頁)

[註5] 「如来性品」から「化身土卷」への引文である。普通は、「佛に歸依する者を、眞の優婆塞と名づく 終に更に、其の餘の諸の天神に歸依せざるなり」と読む所であるが、宗祖は、「眞の優婆塞と名づく」を「乃至」の語を置くこともなく省き、「其の餘の諸天神に歸依せざれ」と、教勅のごとく、命令形にして読みを付けておられ、この一文を、「化身土卷末卷」の巻頭に掲げておられる。前後の經典の文からは、歸依三宝のうちの「歸依仏」の言葉であるが、「歸依法・歸依僧」については、同じようにはされていない。

[註6] 「一切大衆所問品」から「信卷」への引文。宗祖の、「世尊、常に説きたまはく、一切の外は九十五種を學ぶで、皆惡道に趣く」との読み方は独特である。普通には、「一切の外學、九十五種は、皆惡道に趣く」と読む。眞に対して、仮・偽なるものが峻別されている。「偽と言うは、即ち六十二見九十五種の邪道是なり」との言葉が、この直前にある。

[註7] 「信卷」において説かれる「難治の機」の引文は、阿闍世の回心を含むかなりの分量の『涅槃經』からの引文である。それは、「梵行品」を中心としているが、それに先立って、「現病品」において、このような「難治の三機」が問題提起されている。「逆謗闍提」の語は、『教行信証』「総序の文」に出され、「しかればすなはち、淨邦縁熟して、調達、阿闍世をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち、権化の仁、育しく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闍提を恵まむと欲してなり。」「逆謗闍提」の救済を主題としている經典が『涅槃經』であると言われている。『尊号真像銘文』には、「凡聖逆謗齊回入というは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闍提みな回心して、眞実信心海に歸入しぬれば、衆水の海にいたりて、ひとつあじわいと成るがごとしとたとえたるなり。」(『定親全』第三卷、和文篇、118頁)とある。

[註 8] 「聖行品」の文で、「行巻」へ引用される。

[註 9] 前のアンダーラインの箇所から次のアンダーラインの箇所まで「乃至」の語によって、中略が示されている文章は、445 頁 c 段～449 頁 a 段までのかなりの分量である。

[註 10] 同じく、「聖行品」より、「真仏土巻」への引文である。

[註 11] 「梵行品」より「真仏土巻」への引文。経文は以下に連続して続いている。接近している引用であるが、「真仏土巻」では、少し離れた箇所に引文されているので、一応ここで分けた。

[註 12] 「梵行品」より。常・楽・我・浄の四法のうち、常を明かす文が、「真仏土巻」へ引文されている。常と無常が対比されて、論じられている。道と菩提と涅槃、いずれも常である。無常ならば小乗の説であり、外道の説であるとする。宗祖によって、「戒定慧を修するを見んと欲ふが爲に」とあるが、「見んと欲するが爲の故に、戒定慧を修す」という読み方もある。宗祖によって、「是れ見に非ずと雖も、法として亦是れ有なり」とあるが、「是れ見法に非ずと雖も、而も亦是れ有り」という読み方もある。